

へ論 文（民俗学）へ

## 日本磯漁伝統の研究 [XII]

— 磯漁民（見突き漁民）の漁撈伝承研究 —

田 邊 悟

### 要 旨

磯漁にかかわる研究目的の一つは、磯漁（磯漁民）のように各地の沿岸（海浜）で始原的な漁撈活動や生活をしている人々の実態を調査、研究することにより、その暮らしの中に古い時代の海人の伝統生活をみだし、文化要素を抽出しようとするにある。

それはまた、四囲環海のわが国における国民の基層文化を明らかにする文化要素を抽出するための基礎調査であり、研究であるともいえる。

本稿では海人の移動・漂泊にかかわりの深い長崎県西彼杵郡一帯の「家船」<sup>えふね</sup>にかかわる調査を中心に、「家船」の人々が移動・漂泊をやめ、岡（陸）に定住することの過程にあわせ、漁撈伝承・漁法の伝統性等をみていく。その事例として西彼杵郡沿岸の四地域をあげることにした。

キーワード

磯漁 見突き漁 ホコツキ アワビ 家船 モグリ 海村文化 漁撈文化 漁撈伝承 漂泊 民具の法則

目次

(1) 研究目的 (承前)

磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

(2) (長崎県西彼杵郡<sup>にしそまぐ</sup>西中戸<sup>にしなかと</sup> 鰯ノ浦島<sup>かきのうら</sup>) 一帯の磯漁(伝統)

はじめに

地域の史的背景など

[I] 長崎県西彼杵郡<sup>にしなかと</sup>西中戸<sup>にしなかと</sup> (鰯ノ浦島<sup>かきのうら</sup>) の「ホコツキ」

(一) 漁業生産暦と漁法

(二) ホコツキ (漁法) と漁具

(三) その他の聞取り

(四) まとめ

[II] 長崎県西彼杵郡<sup>にしなかと</sup>崎戸町<sup>さきと</sup>本郷<sup>ほんごう</sup>今泊<sup>こんどまり</sup> (鰯ノ浦島) の「ホコツキ」

(一) 漁業生産暦と漁法

(二) ホコツキ (漁法) と漁具

(三) その他の聞取り

(四) まとめ

[Ⅲ] 長崎県西彼杵郡大瀬戸町向島下波しもはとの「ホコツキ」

(一) 漁業生産暦と漁法

(二) ホコツキ（漁法）と漁具

(三) その他の聞取り

(四) まとめ

[Ⅳ] 長崎県長崎市小ヶ倉おぐら字柳あだやなぎの「ホコツキ」

(一) はじめに

(二) 漁業生産暦と漁法

(三) ホコツキ（漁法）と漁具

(四) その他の聞取り

(四) まとめ

小括（おわりに）

## (1) 研究目的（承前）

本稿でいう「磯漁」とは、ムラの地先における磯浜海岸や砂浜海岸など海浜の漁場において、魚貝藻（魚介）類の捕採にあたる男女の漁撈民・漁業者一般とそれを手助けする家族などによる漁撈・漁業をいう。しかし、裸潜水漁によって魚貝藻類の捕採にあたる、所謂蟹人（海人・海士・海女）は基本的には含まれていない。ただし、本稿の調査のように「家船」で暮らしてきた人々の中には裸潜水漁を行ってきた人々もいるのでそのかぎりではない。

裸潜水漁撈者である蟹人を基本的に含めなかった理由は別稿であつたためである。したがって蟹人に関しては拙著『日本蟹人伝統の研究』（法政大学出版局・平成二年）及び『近世日本蟹人伝統の研究』（慶友社・平成十年）を参照されたい。また、「徒（歩）磯漁」とよばれる小船を使用しない「徒」による磯漁も含まれていない。「徒歩」による「磯漁」については別稿であつきたい。

磯漁伝統の研究目的の一つは、四囲が海のわが国にあつて、海とのかかわりをもちつつ暮らしをたててきた人々の始原的で素朴にして基層的な生活伝統が伺えるため。この方面の研究をおこなうことで海浜生活の基層文化の要素を抽出しようとするところにある。また、あわせて、わが国の沿岸各地で漁業が産業として本格化する以前の、物々交換を主とした沿岸各地の生活の様子を見いだすことも可能であるといえる。

## (2) 磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

### （長崎県西彼杵郡一帯の磯漁伝統）

はじめに

この地域の磯漁伝統の特色について述べると、長崎県沿岸諸地域の磯漁は「家船」（エブネ）と呼ばれる人々の伝統的な暮らしがあることである。エブネと呼ばれる通り、船住まいをしながら沿岸各地域を移動しつつ漁業をおこない、かつては物々交換を主として暮らしをたててきた沿岸漁民であった。

したがって、生産・生業の構造（内容）はいたって単純であり、漁具の保有も必要最低限度であるが、そのシンブルな暮らしの中に、古い時代から今日に伝えられてきた磯漁の伝統を見出すことのできる重要な地域であると位置づけることができる。

こうした人々の暮らしの中には、江戸時代に各地の沿岸で漁業が産業として本格化する以前の、わが国各地沿岸の様子を見い出すことができ、再現できる要素があるといえる。

### 地域の史的背景など

長崎県西彼杵郡崎戸町に関しては、地元で刊行された『崎戸町の歴史』および『町勢要覧』等で史的背景などの概要を知るとどまる。

寛永の頃、外国船の警備のために、この地域の沿岸に番所が置かれたほか、流刑地として、また、延宝元年（一六七三）には捕鯨の基地として崎戸島をはじめ、江ノ島、平島はしだいに人口が増加しつつ幕末に至ったという。また、文久二年（一八六二）の作という『大村藩鄉村記』および『大村藩史』には「瀬戸・蠣之浦三村に家船百二十、およそ人員五百余人」と記されているという。<sup>注(1)</sup>

また、木島甚久著『日本漁業史論考』<sup>注(2)</sup>によれば、『大村藩鄉村記』は「天保十一年（一八四〇）後」の編纂と思われるとしたうえで、『鄉村記』に「瀬戸村電数男女数竝案旨分之事の部に、本村の電数六百七十九軒から家船だけは別記し、家船六十三艘男女三百九人・内男百五十八人・女百五十一人・家船皆眞宗」とある。

この地域は戦国期以降、大村藩領に組み込まれてきたが、明治四年の廃藩置県により、大村藩は廃され、崎戸村となった頃は、上述書によると崎戸村は約二百四十戸の家数の漁村にすぎなかった。その後、『漂流海民の人類学』<sup>注(3)</sup>によれば、「明治十九年、崎戸島に連結している突起の、流れのはやい所として有名な、アワビの棲息に適した妹島南方の海底で、潜水中のアワビ採りの漁夫が石炭の塊を拾ったことで露頭が発見され、島内ボーリングの結果、炭層の存在が確認され」、石炭産業の地として発達することとなり、以後、炭坑労働者が数多く島内に流入するようになった。

他方、西中戸や今泊<sup>にしなかと こんどまり</sup>については、前掲書によれば、「今泊は本郷と海峡を隔てた対岸の蛸ノ浦島に属する家船の集落である。一般には中戸家船と同じく、西彼杵郡大瀬戸町の瀬戸家船から分かれた一派であるといわれている。昭和二十九年一月の調査時点で十四世帯あり、古くから対岸の本郷に支配されていたようである。この集落には井

戸などの水源がないので、水を本郷にもらいに行ったり、物々交換でも、本郷に従属的な立場にある」と同書に記されている。

また、「西中戸」あるいは「宮崎」とよばれる集落は、中戸集落に最も近い集落で、八世帯、井戸を持つ家も多いとみえる。

[I]長崎県西彼杵郡崎戸町西中戸（になかと かきのうら）の「ホコツキ」

(一) 漁業生産暦と漁法

西中戸では夏季のモグリ（裸潜水漁）と冬季のホコツキを主に暮らしをたててきた。

家船の人々がこの地に定住する以前、話者の家族は大島の寺島にいたのだが、以後、西中戸に来て、家船は増えたという。調査当時には二十二軒から二十三軒の家族を数えた。

定住する以前、家船で暮らししていた頃は、大島、崎戸、江ノ島や五島列島方面までもでかけ、出かけた先々で定住するようになったと聞いた。中戸の中でも西中戸の漁業者だけが裸潜水漁をおこなう。裸潜水漁や潜ることを「スム」ともいう。

また、船上より、海中、海底を見定めて魚貝藻（魚介）類の捕採をおこなうことを、上述のように「ホコツキ」とよんできた。



長崎県壱岐・釜ノ浦  
国土地理院発行 1:25,000

(右側が北)



ホコツキでの主な捕採対象物はアワビである。アワビ採取のためのホコツキは十二月の初旬からはじまり、翌年の四月いっぱい頃まで続けられる。磯魚やタコなどをホコツキで捕獲するのは一年をとおしてだが、主に十月、十一月の二ヶ月間は漁獲が多いという。

西中戸の旧家船居住者は、裸潜水漁について、以前は「スム」といっていたが、調査当時の昭和五十二年（一九七七）には「モグル」という語彙を使っていた。そのモグリによる作業の時期は、早ければ五月初旬から、九月いっぱいまでの五ヶ月間であるが、普通は六月初旬から九月いっぱいまでの約四ヶ月間であった。

アワビ採取のほかには、イシダイをはじめ、クロダイ、アラなどを「ツバクロ」と呼ばれる「モリ」を用いて突き取った。

その他、イサキの追込網は四月初旬から九月いっぱいまで、共同の漁としておこなわれてきた。船数は十二艘から十四・五艘の船団を組んでおこなわれる規模の大きな漁で、水深二十尋から三十尋の沖から、鉄製のクサリを二つぐらい縄に結びつけて魚をおどしながら浅い場所を追込み、イサキを追込んだあと、途中で網を入れ、張った網の中に入れるようにして漁獲する。個人で網を所有してしない者でも追込みを手伝い、

長崎県西彼杵郡崎戸町西中戸(蛸ノ浦島)の漁業生産暦(新暦) 江崎三太郎氏聞書 (昭和6年2月15日生)

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
ホコツキ												-----	アワビ
													魚突き・タコ等
スム(モグリ)					-----								アワビ 魚突き(イシダイ)
イサキ追込網													共同の漁
タイカズラ網													共同の漁

(注) (昭和52年7月29日調査)  
「モグリ」に関する調査結果の報告は拙著『日本鯺人伝統の研究』を参照されたい。

分け前をもらう。網子の役割をするのである。

タイのカズラ網も同じような共同の漁法である。ブリと呼ばれるオドシを使ってタイを網の中に追込んだ。漁期は三月初旬から十月下旬まで。

話者の江崎三太郎氏宅では定住以前は家船で暮らしてきたので漁業専業で、定住以後も農業はまったくおこなっていない。

## (二) ホコツキ（漁法）と漁具

上述したように、エブネ（家船）の上から箱眼鏡を用いて海中、海底を覗き見て、棹（竿）の先に付けた鉄製の「アワビオコシ」でアワビを採取したり、「ホコ」で魚突きをおこなうなどの漁法を西中戸では「ホコツキ」という。生産暦の項でも述べたが、個人での漁業生産は冬季のホコツキと夏季のモグリとの組み合わせで一年間の生産のローテーションを組んでいる人々もいるが、あわせて共同（団体）での漁業生産であるイサキ追込網やタイカズラ網をおこなっている人もいるほか、逆に、追込網やカズラ網が主で、そのあいまにホコツキをおこなう人もいる。

## (三) その他の聞取り

家船暮らしの時代の船は、家族全員が船上で暮らしていたので、船の横幅もフトク（太く）、肩幅はおよそ七尺ほどであった。船の長さは全長四尋から五尋であった。（一尋は約一・五メートル）。操船には帆と櫓を使った。

#### (四) まとめ

本調査は昭和五十二年（一九七七）七月二十九日に実施したものである。調査の内容は長崎県西彼杵郡崎戸町中戸（蛸ノ浦島）五七四に在住の江崎三太郎氏（昭和六年二月十五日生）からの聞き取りを中心にしたものである。この地ではモグリ（裸潜水漁）のことを以前は「スム」と呼んでいたことがあり、時代により語彙の変化がみられることは注目される。また、家船の暮らしは生産構造が単純であり、漁獲物のうちでもアワビ採取にたよるところが大きい。このことは、わが国における磯漁伝統が存続する根源的なあり方にかかわっているとみることができるとすなわち、わが国で磯漁（見突き漁）が伝統的に存続できた背景には、日本の沿岸各地に経済的価値の高いアワビが生息しているということが第一にあげられる。その他にも捕採対象物は地域によって多少のちがいはあっても、生業としての磯漁（見突き漁）の存続に欠かせなかったのはアワビであり、アワビ採取にかかわる磯漁の比重は大きい。もし、わが国沿岸にアワビが生息していなかったなら、これほどまでに各地で伝統的な磯漁（見突き漁）はおこなわれなかったであろう。

#### 〔Ⅲ〕長崎県西彼杵郡崎戸町本郷<sup>こんどまり</sup>今泊（蛸ノ浦島）の「ホコツキ」

##### (一) 漁業生産暦と漁法

今泊に在住の話者海辺又四郎氏の漁業生産暦は、年間を通しての「ホコツキ」（鉾突）と夏季の「ハダカモグリ」に限られ、いたってシンプルである。

船上から海中、海底を見定めておこなうホコツキは年間を通しておこなわれてきた。

こうした生業は、以前、「エブネ」（家船）で暮らしてきたのであるから当然のことであるが、アワビ採取には禁漁期間があり、その禁漁期間は十一月二十日から十二月二十日までの一ヶ月間と決められていたもので、この間はアワビ採取はできなかったが、サザエをはじめ磯魚であるキッコリ、オオガシ、イシダイなどを主に、先端が三本に分かれた鉄製のホコで捕獲するほか、タコを捕獲したりしてきた。

また、ナマコは十一月初旬より翌年の三月いっぱいまでの冬の時期に捕獲した。

海藻採取の主なものはワカメで、以前は旧暦の二月二日より採取がはじまったが、近年は三月二十日より四月十日までの約一ヶ月間が主な漁期。だが、年によつては四月いっぱいまで採取した年もあった。

夏季の「ハダカモグリ」は六月初旬にはじまり、九月いっぱいおこな

長崎県西彼杵郡崎戸町本郷今泊（蛸ノ浦島）の漁業生産暦（新暦） 海辺又四郎氏聞書（大正4年9月20日生）

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
ホコツキ （鉾 突）													アワビ （禁漁11月20～12月20日）
													サザエ
													魚・タコ （キッコリ・オオガシ等）
													ナマコ
													ワカメ（旧暦の 2月2日より）
													アワビ・サザエ・魚 （キッコリ・オオガシ・イシダイ）
ハダカモグリ													

（注）「ハダカモグリ」に関する調査結果の報告は拙著『日本鰺人伝統の研究』を参照されたい。 （昭和52年7月27日調査）

われた。主な捕採対象物はアワビ、サザエの採取の他、磯魚のキッコリ、オオガン、イシダイなどをホコで突くことであった。

## (二) ホコツキ（漁法）と漁具

ホコツキで船上よりアワビ採取をおこなうには、「アワビオコシ」または「アワビトリ」と呼ばれる漁具が用いられてきた。

「アワビオコシ」の先端はステンレス製で、長さが三十五センチ、丸棒の太さ約〇・六センチ、最先端が約二センチほど曲げられている。このアワビオコシは小型のもので、他の大型のものは、ステンレス製の部分の長さが約五十センチ、丸棒の太さ約〇・八センチで、先端部分は四センチほど曲げられており、いずれも三メートルほどの長さにつなげたカシ材の棹（竿）の先にすげられている。（写真右はし）

また、「アワビトリ」と呼ばれる漁具は、先端の鉄の部分が一又になっている。鉄製の部分の長さ約二十センチ、丸棒の太さ約〇・九センチで、先端にいくにしたがつてやや細くつくられている。二又に開いた先端部分の幅は約四センチ。この間にアワビをはさみ込む。（写真参照）

したがって、アワビの生息している場所の海底の様子によって、採取しやすい「アワビオコシ」か「アワビトリ」を使いわけると、アワビの生息している場所の海底の様子によって、採取しやすい「アワビオコシ」か「アワビトリ」

アワビトリには種類があり、水深が六メートルから七メートルと、深い場所のアワビを採取するには、全体がや

や大型のもので、重量のあるものが使われ（写真右より三本目）、二尋から三尋の浅い場所のアワビを挟むときに使用されるアワビトリ（写真右より五本目）がやや小ぶりで深い場所で使用されるものより軽い。いずれもカシ材の棹（竿）の先端に付けられている。

この他、アワビを採取するためには、「カイサシ」と呼ばれる道具が使用される。（写真右より二本目）

カイサシは、岩礁に付着しているアワビをアワビオコシで岩礁よりはがし、ひっくりかえって（裏がえしになつて）海底に落ちたアワビの肉の部分を、できるだけ傷つけないように注意して突き刺し、船上にあげるために使用される。したがって、できるだけ小型に製作されるのが普通である。カイサシはアワビトリを用いてアワビを岩礁からはさみ取った際、アワビが海底に落ちてしまった時には、同じように使用する。

カイサシはステンレス製で、先の部分が二又に分かれており、長さが三センチほど。直径〇・三センチほどで先端にいくほど細くなっており、内側に向いてカエシ（イカシ）が左右より付けられている。竹の棹（竿）の先端にすげられているが、棹（竿）は比較的細いものが使われている。（写真右より二本目）

サザエは先端が三つ又になっている「サザエハサミ」を用いて挟み取る。年間を通して採取されるが、サザエ、タコ、ワカメは上述した通り、二月から三月にかけての漁で、特にワカメ採取は旧暦の二月二日になるとおこなわれたので、その頃がサザエ、タコの漁獲も多かったという。

サザエハサミの先端は鉄製の丸棒の長さがそれぞれ約十センチで、直径は約〇・六センチほど。カシ材の棹（竿）の先にすげられている。先端部分の三本に分かれた鉄製の丸棒の部分は正三角形のそれぞれの角に位置するようにつくられているが、先端にいくにしたがって開いてすげられている。サザエを挟みやすくするように工夫されてい

る。(写真左はじ)

ワカメ等の海藻採取には「ワカメキリ」と呼ばれる小型の専用のカマ（鎌）が使われた。ワカメキリは刃の長さが約十センチ、幅が二センチほどで、鉄製の首の部分の長さが二十五センチほどある。カシ材の柄にすげられているが棹（竿）の先端部分だけが檜材で、後の部分は竹材。（写真左側より二本目を参照）

このほか、ホコツキをおこなう際に船上より海中、海底を覗き見るときに用いる四角いメガネを「ハコメガネ」と呼んでいる。

話者の海辺又四郎氏が使用のハコメガネの大きさは、上部の覗き見る部分が縦横とも六寸、下部の幅の広い部分が縦横共に一尺六寸で、高さ（深さ）一尺八寸のもので材質は杉材。船大工に注文して製作してもらったものだという。黒瀬、大島でつくったと聞いた。

話者が使用している他のハコメガネの実測結果は、顔のあたる上部は、縦横が共に二十二センチ、下部のガラスのはめてある部分の縦横が共に四十七センチ、高さ（深さ）は五十センチであった。

このハコメガネを使って海中、海底を覗き、魚貝類（魚介）類等の捕採をおこなうのは船の舳先に近いオモカジ側（進行方向右側）である。ハコメガネを使用するときは、左手で持って覗くだけで、特に細紐のようなもので船に縛りつけておくというようなことはない。

ホコツキの棹（竿）に用いる竹材は山に出かけて切ってきたものを使用した。また檜材の棹（竿）は、船の櫓の古い材を削って使うなど、廃物利用（再利用）をすることがほとんどであったという。

ホコツキに使用している（調査当時）漁船は、肩幅約三尺半、長さ約十六尺ほどの小型の漁船を使用していたが、

家船時代の船は、肩幅約六尺、長さは約二十尺から二十五尺、二挺櫓を使って操船していたという。

船上では時々、奥さんも魚突きを交代でおこなったこともあると聞いた。

操船の際にはお互いに言葉をかけあう。前進を望むときは「オシター」、ゆっくり前進の時は「ジワジワー」、オモカジ（右側）へは「オエエー」、トリカジ（左側）へは「フカエー」と声をかけて伝えながらホコツキをおこなってきた。

### （三）その他の聞取り

崎戸島には家船の暮らしから岡（陸）へあがつた人はいないが、蛸ノ浦島の今浦こんうらには五軒から十軒ほどの家船の人々が住んでおり、今では（調査当時）では漁業協同組合も一緒になっている。大島には漁業協同組合が一つと、その支所が三つあり、崎戸漁業協同組合本郷支所には組合員が百数十人はいるといふ。

本郷と蛸ノ浦は元浦だと云っている。炭坑は三菱が経営していたが十年前（調査時の）に閉鎖した。

五島列島の檜ノ浦や大浜（富浦）でも、話者と同じホコツキの漁法で魚貝藻類の捕採をおこなっているのを見たという。

話者の奥さん（チンさん）も、たまには船上でホコツキ（鉾突）を交代し、魚突きなどをおこなってきたという。捕獲した魚は背割りにして塩にし、天日乾燥しておく。

家船で暮らしていた頃は、港にはいるとトマガケをして碇泊すると、女が漁獲物を持って、近くの農家に売りに



出かけた。また、主にイモ（サツマイモ）、ムギ（大麦）、野菜などと物々交換をした。漁獲物を仲買人などに売ろうになったのは、その後のことであつた。

海上禁忌などについては、家船で暮らしていた時代には、牛を見たり、「岡に牛が通っている」のを見ると、風がでたり、天候が悪くなるといつて牛をきらつた。

「サル」、「ヘビ」、「ネコ」という言葉を船上で使つてはいけない。

手に持っている包丁をはじめ「切れ物・刃物」はもとより「金物」を海中に落とすことをきらつた。

梅干しの種を海中に落としてはいけない。

ハダカモグリをおこなっている際、潜る場所により、「龍宮さん」のいる近くを潜ると「寒氣」がしたり「頭痛」がしたりしたという。

#### （四）まとめ

本調査は昭和五十二年（一九七七）七月二十七日と二十八日の二日間<sup>こんどまり</sup>にわたつて実施したものである。

調査の内容は、長崎県西彼杵郡崎戸町本郷<sup>こんどまり</sup>今泊（蛸ノ浦島）一九四五に在住の海辺又四郎氏（大正四年九月二十日生）と奥様の海辺チンさん（大正八年四月十五日生）からの聞き取りを中心にしたものである。

話者は西彼杵郡大瀬戸町より、この地に来て岡あがりをして定住したと伺つた。蛸ノ浦島の今泊には、同じように岡あがつた家族が十軒ほどあるが、調査当時はすでに漁業協同組合にも一緒にはいつていた。

本調査における漁具はすべて話者の海辺又四郎氏所有のもので、実測や写真撮影に関して、格別のご高配を得た。また、七月二十八日の午前中は海辺夫妻とホコツキ（漁）に出漁する機会を得て、タコツキ、サザエ採取などをおこなうことができたし、写真撮影もおこなわせていただいた。

生産暦の項でも述べたが、話者がおこなってきた生産・生業に関する魚種や漁法はいたってシンプルであることがわかる。

このことは、ホコツキ（鉾突漁）という漁業生産活動がいかに始原的であるかを物語っているといえる。また、それにもかかわらずアワビ採取をおこなう際のように漁具を数種類準備して使用することは分化した専門性を象徴しているとみてよい。というのは、民具は、その使用する「ヒト」にとって、専門化が進めば進むほど数が増え、仕事（作業）工程・生産過程（生業過程）が分化するという法則性があるためである。

すなわち、民具は、それを使用する「ヒト」が専門家になればなるほど細分化されて数を増していくものであるという、筆者の提唱してきた「民具の法則」に合致するものである。

### 〔Ⅲ〕長崎県西彼杵郡大瀬戸町向島下波の「ホコツキ」

#### （一）漁業生産暦と漁法



長崎県板浦  
国土地理院発行 1:25,000

話者の岩瀬浅蔵氏（大正十五年三月十二日生）及び岩瀬竹四郎氏（大正十二年六月十五日生）は「家船」で生活していたが、昭和四十四年頃から四十五年頃にかけて、福島<sup>4</sup>の埋立てがすすみ、島でなくなった頃から岡にさがって定住したと聞いた。

家船での生業としての暮らしは一年を通して単純で、「ホコツキ」（鉾突）と「スム」（裸潜水漁をおこなうこと）であつた。

ホコツキは九月初旬から翌年の四月いっぱいが普通だが、五月下旬頃まで続けることもあつた。主にアワビ、サザエ、ナマコの捕採のほかに魚突きをおこなつたが、魚突きの数は少なかったという。

また、裸潜水漁は、はやければ五月初旬頃からはじめるが、普通は六月初旬頃から八月下旬頃まで。九月いっぱいまでおこなう年もあつた。

主な捕採対象物はアワビ、サザエの貝類だがイシダイ（フサ）などの魚突きもおこなってきた。

個人的には、釣り漁や網漁をおこなうことはなかったが、漁網を所有している仲間の家船（網主）の網子としてキビナゴの地曳網を手伝ったり、冬場にタイのカズラ網漁の手伝いをおこなうことはあつた。<sup>注4</sup>

## （二）ホコツキ（漁法）と漁具

この地の家船でのホコツキは、口碑によれば二百五十年もの伝統があるといわれる。

ホコツキでは上述のように、アワビ、サザエ、ナマコの捕採のほかに魚突きもおこなってきたが、アワビ、サザ

エの捕採が主で、魚の漁獲は少なかった。

アワビ採取には竹棹（竿）の先に鉄製の「ヒラオコシ」と呼ばれる筥状の道具をつけて使った。ヒラオコシは長さ九センチ、幅一・八センチ、厚さ〇・三センチほどの鉄製の筥状をした道具で、先端にいくにしたがつて、やや幅が広く、丸みをおびており、厚さはうすくなっている。

この鉄製の部分は、全体の長さは約二十センチほどあるが半分近くは柄の部分に合わせるような状態で上げられている。（写真参照）

古い時代には、柄は竹棹（竿）であつたといい、このヒラオコシで岩礁に付着しているアワビを突きはがしたあと、ひっくり返った（裏返った）肉の部分に「キヤーサシ」（カイサシ）と呼ばれる道具を使ってアワビの肉の部分突きさして採取していたという。（今泊の項参照）

キヤーサシは二又に分かれた小さなホコで左右からカエシが付けられている。先端の幅は一・五センチほど開いている。全長約九センチほどで、先端の約三センチほどが二本に分かれている。この鉄製のキヤーサシを竹棹（竿）の先端にとり付けて使用する。ヒラオコシで裏返したアワビを突きさして船上にあげる。

アワビとりは、最近では「カギ」を使うようになったというが、それ以前はすべてヒラオコシとキヤーサシを使って採取していたと聞いた。また最近使用されている

岩瀬 浅蔵氏聞書  
(大正15年3月12日生)

岩瀬竹四郎氏聞書  
(大正12年6月15日生)

しもほと  
長崎県西彼杵郡大瀬戸町向島下波の漁業生産暦(新暦)

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
ホコツキ					-----								アワビ・サザエ ナマコ・魚
ス ム					-----	-----	-----	-----	-----				アワビ・サザエ インダイ(フサ)

(昭和52年 7 月29日調査)

「カギ」は丸形ではなく「角型」のもの。

サザエは「サザエバサミ」を使って採取する。サザエバサミは先端が三本に分かれた鉄製の道具で、それが棹（竿）の先に付けられている。

魚類は船上から「ホコ」を用いて突きさす。ホコの先端は三本に分かれており、真中の一本が極端に短いのがこの地域のホコの形態の特徴である。

ホコツキの道具の柄（棹・竿）はすべて竹材を用いてきた。棹（竿）に用いる竹材は「マダケ」で山に行つて切つてきたものを自製した。

「カガミ」（箱眼鏡）がなかった時代には「トラシアブラ」というエイの内臓（キモ）などからとる油を海面に流し、風がとまったときに船上から海中、海底を見定めて、捕採対象物を確認し、捕採したという。その後、カガミは杉材の板を用いて自製したという。したがって、大きさには個人差がある。

### （三）その他の聞取り

漁船は瀬戸町の船大工に建造してもらった。櫓は櫓屋が長崎市内にあったので、そこで求めた。また、櫓屋でアカガシ（赤櫓）の櫓に使う材と同じカシ棒を買い、それを自分で削つてカシザオ（櫓棹・竿）をつくつた。

ホコツキで捕採した漁獲物はツケヤドと呼ばれる家で物々交換でカエキ（交換）した。

昭和二十年頃までは、家船の人々は畑などの耕地をまったく所有していなかったので、主食をはじめとする農産

物はすべて物々交換にたよって暮らしていた。特に交換の基準はなく、個人、個人の気持ちで交換をおこなっていたという。

#### (四) まとめ

本調査は昭和五十二年七月二十九日に実施したものである。調査の内容は、同地在住の岩瀬浅蔵氏（大正十五年三月十二日生）及び岩瀬竹四郎氏（大正十二年六月十五日生）からの聞き取りによるものである。

この地域ではアワビ採取の道具が「ヒラオコシ」から「カギ」に変化したこと、また、「カガミ」導入以前の漁法として「トラシアブラ」を使用していたことなど、この方面の研究をおこない、他地域と比較するための基礎資料としても貴重な聞き取り調査を実施することができた。

#### [IV] 長崎県長崎市小<sup>お</sup>ヶ<sup>が</sup>倉<sup>くら</sup>字<sup>あ</sup>柳<sup>やなぎ</sup>の「ホコツキ」

#### (一) はじめに



長崎西南部  
国土地理院発行 1:25,000



この地は、もと「家船」で暮らしていた人々の、のちになってからの定住地で、話者も四十年ほど前（昭和十年頃）、この地に定住したと聞いた。

この地の苗字が明石（あけいし）（三軒）、岩瀬（二軒）、中瀬（二軒）、三島（二軒）の合計九軒は、それぞれ家船で天草の牛深方面へ出かけていたことがあったという。

話者は、昭和二十九年死去した明石已代作氏（話者の父親）の代に、この地に定住するようになったと伺った。

以下は、家船で暮らしていた頃の「ホコツキ」（鉾突）と「カツギ」（裸潜水漁）の組みあわせによる生活の若干の聞取り調査の結果である。

## （二）漁業生産暦と漁法

家船で暮らしていた頃は、十月初めから翌年の三月の終わりまで「ホコツキ」（鉾突）をおこない、四月初旬から九月いっぱい「カツギ」（裸潜水漁）をおこなうといった生活であった。

このような家船での生業のたてかたは、前述した長崎県西彼杵郡の大瀬戸町の暮らしと同じで、同地には親戚関係にあたる人達もあり、大瀬戸町にも「岩瀬」という本調査地と同じ苗字があるのはそのためであるという。

おがくら  
長崎県長崎市小ヶ倉字柳の漁業生産暦（新暦）

明石三之松氏聞書  
（大正5年11月20日生）

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
ホコツキ													アワビ・サザエ ワカメ・イセエビ
カツギ													アワビ・サザエ タコ・魚突き

（昭和52年7月30日調査）

ホコツキではアワビ、サザエ、ワカメ、イセエビなどが主な捕獲対象物である。また、カツギ（裸潜水漁）ではアワビ、サザエの他タコ、イセエビの捕獲や魚突きをおこなってきた。

（三）ホコツキ（漁法）と漁具

ホコツキで使用する「ホコ」は先端が三本に分かれた鉄製のもので、柄に竹棹（竿）を付けたものであった。三本のうち、中の一本が短かいのが特色で、内側にカエシが付けられている。

アワビは棹（竿）の先に付けた鉄製の「カギ」でかけてはがし、「キヤーサシ」（カイサシ）と呼ばれる約三センチほどの長さの、先端が二本に分かれた小型のホコで突き取る。カギの鉄製の部分の長さは約四センチあるが、長さの異なるカギを数本準備して出かけ、状況にあわせて使用する。キヤーサシにも内側にカエシが付けられている。このキヤーサシを使ってアワビを突き刺すときは、肉の部分を突くが、できるだけいたまないように注意する。

サザエは、先端が四本に分かれた鉄製の「サザエハサミ」とよばれる道具ではさんで採取する。サザエハサミも大小数本を準備している。

ワカメはワカメ切り専用の「カマ」で刈り、そのあと、カマを用いて船上にひきあげた。

（四）その他の聞取り

カツギによるイセエビの捕獲は「カギ」を用いてかけ取る。

カツギによる魚突きは「ツバクロ」と呼ばれる離頭鉈を用いる。柄は竹材。主な捕獲の対象はヒサダイ・イシダイ・ヤーノイオ・オーガンであった。

漁船は小ヶ倉に近い深堀の船大工に注文して建造してもらったという。

#### (五) まとめ

本調査は昭和五十二年七月三十日に実施したものである。調査の内容は、同地在住の明石三之松氏からの聞取りによるものである。

この地の聞取りは、上述の通り大瀬戸町と同系の家船の人達の定住地であるため、使用する漁具の名称、形態などの詳細は長崎県西彼杵郡大瀬戸町向島下波の項に同じであるため、簡単な調査にとどめた。

#### 小括（おわりに）

本稿は長崎県西彼杵郡の沿岸諸地域において、「家船」で暮らしながら伝統的な磯漁（見突き漁・ホコツキ）をおこなってきた四地域の調査結果である。

過去において「家船」で暮らしたことがある話者からの直接の聞取りを中心にした。調査当時はすでに岡に아가

つて定住生活をしている家族の方々であったが、海上を移動し、波を枕に暮らしてきた経験者の方々から伺った体験談は貴重であるといえよう。

特に「カガミ」（箱眼鏡）導入以前には「トラシアブラ」といって、エイの内臓（キモ）などからとる油を海面に流し、風がとまった時に船上から海中、海底を見定めて魚貝藻（魚介）類の捕採をおこなってきたことなど、貴重な聞き取り調査をすることができた。なお、「エイ魚を煮た油を用い、その残りは灯油にした」ことは『日本漁業史論考』（木島甚久著・六十頁）にもみえる。

また、もと「家船」で暮らしたことのある大瀬戸町向島下波の岩瀬浅蔵氏のように、アワビ採取をホコツキでこなうに際して、三種類もの漁具を準備して出漁するなど、アワビ採取の重要性と、専門化していることを象徴的にみることができるといえる。

すなわち、上述したように「民具は、それを使用する（ヘイト）が専門化すればするほど分化し、数が増える」ということを前提として、「すべての仕事において使用され、活用される民具はそれを使う（ヘイト）が専門化すればするほど細分化する」という民具増加の法則性がそこにみられる。ただし、ここでいう専門化は分業化ではない。

このことに関しては、辻井善弥氏が筆者と同じ話者からの聞き取り調査の結果とし、同地ではアワビ採取用具が四種類もあつたことを報告している。

すなわち、『磯漁の話』<sup>注(5)</sup>によれば、大瀬戸町では「ホコツキ」でアワビ採取をする際に四種類の採取用具があると記録している。具体的にみれば、第一は「オオゾ」<sup>注(6)</sup>または「オオプト」と呼ぶ、アワビを突き挟む機能をもつもので、二本の鉄棒の間にアワビを挟み込んで採取する道具である。

第二は「ヒラオコシ」とよばれる篋状のもので、平坦な岩にアワビが付着している時に使用するもので、先端部のそりが大きい所に特色がある。「ヘラ形」のものである。(写真参照)

第三は「キヤーサシ」(カイサシ)と呼ばれる道具で、岩に付着しているアワビを裏返したあと、アワビの肉の部分の突起を船上に引き上げるための小さなホコをいう。

第四は、アワビを引っかけて岩礁から取る「カギ」で「キヤーサシ」とあわせて使われることが多い。

「カギ」は上述の通り、比較的新しい漁具であるという。

いずれにしても、このように三種類ないし四種類もの漁具を使用してアワビ採取をおこなってきたということは、「家船」で暮らす人々にとって、アワビの捕採がいかに重要な漁獲対象物であったかを示すことができることに、我が国沿岸において、アワビが生息していなければ、磯漁はこれほどまで伝統的な発達をみなかったのではないかといえよう。

## 参考文献及び引用文献

## 注

- (1) 野口武徳『漂海民の人類学』弘文堂 一九八七年

- (2) 木島<sup>じんきゆう</sup>甚久『日本漁業史論考』誠美書閣 五一頁 一九四四年

- (3) 前掲書注(1)に同じ

- (4) 拙著『日本蟹人伝統の研究』法政大学出版局 五一四頁 一九九〇年

- (5) 辻井善弥『磯漁の話』北斗書房 一九七七年

- (6) 注(2)に示した『日本漁業史論考』中には「オゾウ」と記載されている



西中戸の集落点描  
(中戸橋上より)



西中戸を望む  
(手前は中戸瀬戸)



西中戸のホコツキ漁船



ホコツキをする  
海辺又四郎氏

写真右側より

- |          |        |
|----------|--------|
| 一本目(右はし) | アワビオコシ |
| 二本目      | カイサシ   |
| 三本目      | アワビオコシ |
| 四本目      | ホコ     |
| 五本目      | アワビトリ  |
| 六本目      | ホコ     |
| 左より三本目   | ホコ     |
| 左より二本目   | ワカメキリ  |
| 左はし      | サザエハサミ |



今浦のホコツキ漁具



ハコメガネ  
(今浦)





ホコ タコを捕獲する



サザエハサミでの漁



ホコツキの漁船  
(今後方で操船するのは奥さん)



アワビ採取のカギ



大瀬戸町向島下波点描

大瀬戸町向島で使用のホコツキ漁具



ツバクロ  
(先端に  
装着前)



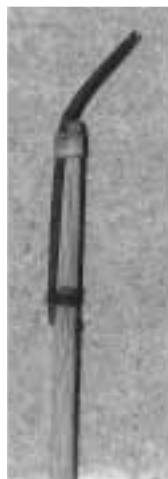
ツバクロ  
(先端に  
装着後)



オオゾ  
(二本・  
一本は影)



サザエバサミ  
(三本・  
一本は影)



ヒラオコシ



小ヶ倉字柳の  
ホコツキ漁具



カギ・オオゾ (オオフト)  
(向島)



長崎市小ヶ倉字柳の  
ホコツキ (漁船)



左よりカギ・サザエハサミ・キャーサシ・  
カマ (二本) 向島にて